

イギリスでロングステイ！！

(その2)

福島啓子



前号ではイギリス滞在中、スーパー・メアという港町で参加したボランティア活動を紹介しました。ここではプライベートで旅した観光地を紹介します。



- ① スーパー・メア
- ② バース
- ③ ウェールズ
- ④ チェダー
- ⑤ グロースター
- ⑥ バーフォード
- ⑦ ストーン・ヘンジ



Bath

2000年以上前古代ローマ軍が建設したといわれる温泉、神殿の遺跡で、世界遺産に登録され、Bath(お風呂)の語源といわれています。その後、18世紀半ば富裕層階級の温泉社交場として栄え、1878年発見された遺跡がローマン・バス博物館として公開されていて、今でも毎日125万ℓのお湯が湧き出ています。2006年には本格的スパ(サーメ・バース・スパ)ができ観光客も気軽に温泉に入ることができます。(水着の貸出もあります)。

又、ジョージア王朝に建てられた壮麗な建物、Number One Royal Crescentは世界一美しい集合住宅として有名です。一階にはホテル、博物館があります。周囲は広い公園になっていて、音楽堂もあり皆、思い思いの休日を楽しんでいました。小さな路地にはアンティークショップが立ち並び、ドイツから来た老夫婦が大きな皿を探していました。その他、バース寺院、美術館、など見所がたくさんあり、一日歩いてもたまりません。

帰りがけにスタバで休み、スーパー・メアに着いたのが、20:00近く。日曜日で町中のお店は閉まっていたせいでしょうか(16:00頃閉店)まだまだ外は明るいのに人がほとんど歩いていませんでした。小さなスーパーだけが辛うじてあいていたので、パンと牛乳を買って急いでフラットに帰りました。



バース寺院



ロイヤル・クレセントの前で

【海外ロングステイ】

Wells 地方 キャッシーロード(城)があるので小さくても市としての機能をもっています。スーパーメアから路線バスで1時間ほど南東に下った場所に位置します。朝、バス停がわからず、道行く人に聞きながらやっと 9:00 発のバスに乗ることが出来ました。(運賃、往復7ポンド)メアから Wells までのバスの旅はのどかな田園風景や、小さな町や村がつづく、ほのぼのとしたものでした。途中の町、村の道路は幅が狭く、車やバスがすれ違う時大変でした。昔お城だった、The Bishop's Palace は美しい庭園と白鳥で有名です。(現在は2羽だけですが...)隣にあるカテドラル(大聖堂)は、ゴシックスタイルで建てられた初めての大聖堂で、中のステンドグラスは世界の中でも最高の一つであると言われています。又 1390 年に作られた世界で二番目に古い時計は今でも動いています。教会の素敵なレストランでゆっくりティータイムを取ることもできました。



ウェールズの町



カテドラル

Gloucester

スーパーメアから列車に乗りブリストルで乗り換え2時間弱でグロスター駅に到着

(ホームが長く、同じホームで行先の違う列車が止まっています)

この日は天気が良く公園の芝生では上半身裸で日光浴をしている人が目立ちました。グロスターの大聖堂はどの角度から眺めても美しい教会で、高さ 70m の塔は中を階段で登ることができ上まで行くツアーがあります。塔の途中で時を告げる鐘をならす装置があり、この場所に来た時、鐘がなります。ツアーの最後には証明書が出ます。(実は買うのですが)ここは廊下が回廊になっていて、中庭の公園に出られます。ここでよしえさんというエジンバラ在住の日本人女性と友達になりました。エジンバラのツアーガイドをしているそうです。又、この教会はあの有名な映画、“ハリー・ポッター・シリーズ”で何度か撮影に使われていたのです。そして隣接するキングス・スクールの生徒達も映画にエキストラとして出演していたそうです。この学生さん達の写真も撮らせていただきました。(皆、色白で美人でしたよ)大聖堂脇の小路にピーター・ラビットの原作者であるビクトリアス・ポターが滞在しグロスターの仕立て屋という本を書いた家があります。今この家はかわいいお店となって賑わっています。店の店員さんが 明日はオリンピックトーチが来るから見に来なさい、と言ってくれました。



大聖堂



お店で買いました



ピーター・ラビットの小物

【海外ロングステイ】

Burford

ロンドンから西 200km にある南北 160km に及ぶ美しい丘陵地帯、コッツォルズは中世の面影を残し、特別自然美観地区に指定され、コッツォルズ・ストーンと呼ばれる蜂蜜色の石灰石で造られた家々と絵のように美しい田園風景が広がり世界中から観光客が訪れています。今回はとも子さんの友達の圭子さんが車で案内してくれました。この辺りは湖や川が多く、たくさんの白鳥が泳いでいました。アンティークの店も多いので、ゆっくりとした時間の流れを楽しみながら散策することをお勧めします。前回訪れたテッドベリーという村には王室の別荘があり、チャールズ皇太子の別荘の前を通りました。又チャールズ皇太子の経営するお店もありました。



バーフォードの村



白鳥の泳ぐ川

Salisbury STONEHENGE (世界遺産)

8:50AM ロンドンウオータールー駅 6 番線からソールズベリー行きの列車に乗り込みました。出発して 20 分も経つと羊が放し飼いにされたのどかな田園が広がり菜の花畑が現れました。すべてを忘れただゆったり..... 列車の旅の始まりです。隣に乗り合わせて婦人は編み物を始めました。この婦人は友達を訪ね、翌日のマラソン大会に出場するそうです。いくつかの町をすぎ、乗客は変わりましたが列車の外に広がる景色は変わりません。10:20AM 列車は静かに、ソールズベリーの駅に到着しました。婦人と別れストーンヘンジ行きのバスに乗りました。(ストーンヘンジ見学を含み 20~25 ポンド)。バスにゆられて 30 分、町を抜けると目の前に、大平原に唐突に突き出たサークル状の巨石群が現れました。その歴史は 5000 年以上昔に遡り、現在の物は 3500 年前の建物の遺蹟化したものとされていて、太陽と月の動きを辿るために建設されたといわれています。しかしまだまだ解明されていない事が多いということです。5ヶ国語の音声ガイドが無料で借りられます。この日は天気が良く、日本からの観光客も多かったです。

帰りはソールズベリーの町の中心(マーケットプレイス)でバスを降り、大聖堂を見学しました。

800 年近い歴史をもつこの大聖堂はいくつもの英国一があります。

◎中世ゴシック建築で一番大きい建物 ◎123mの英国一高い小塔がある。

◎床面積が広く、回廊の広さ英国一。◎1386 年から 600 年以上動き続けている時計。

◎現在の様な聖歌隊のサービスが始まったのが英国で一番早い。 などです。

そして私が驚いたことは、中のレストランの屋根の部分の部分が総ガラス張りで、英国一高い小塔の屋根が見えるようになっているのです。英国でたくさんの教会を訪れましたが、ガラスの屋根は初めてでした。雨や雪の時は、どうなるのか、又来てみたくなりました。このレストランでお茶を飲んでいる時、隣のテーブルで若い修道士さんが熱心に勉強していました。駅までは徒歩 10 分というので、のんびり街を見学しながら歩きました。5:00PM ロンドン行きの列車に乗りました。



【海外ロングステイ】

イギリスの長距離列車は一等と二等があり、一等はかなりゆったりサイズになっています。二等でも前後の幅が広く、十分なスペースがありました。が乗客のマナーはいまいちです。下車した後の座席にはペットボトルが置いてありました。



ストーン・ヘンジ



大聖堂



レストラン

ロンドン大学

私は出発前夜知人から一人の女性を紹介されました。彼女はロンドン大学で、世界各国からの留学生に中国語を教えていました。日本にも9年間住んでいたもので、日本語も上手でした。

ロンドン大学は古い歴史を持ち現在は19のカレッジと12の研究機関をもち、各カレッジは独立した大学となっています。合計学生数は10万人を超えるそうです。ロンドン大学の際立った特色は“人々のための大学”という伝統です。この伝統は昔、英国国教会の信徒のみに進学が許されていた、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学に対抗して、人種、宗教、政治的信条に関わりなく広く学問への門戸を開くために設立されました。もうひとつの特色は通信教育課程にあり、世界180ヶ国41000人の人が学んでいます。(ネルソン・マンデラも学んだそうです)。

彼女に案内され、大学内の留学生と同じ椅子に座っている事が信じられませんでした。そしてどうしても見せたい物があると、私を連れて行ってくれた所がありました。そこには、日本庭園が造られ、幕末に鎖国の禁を犯してまで留学した、伊藤博文、井上馨をはじめ19名の日本人の名が刻まれた碑でした。のちに明治政府設立に携わった人たちです。この公園に碑が立ち、きれいに維持されているということから、イギリスと日本の強い絆を感じると共に、それを改めて教えてくれた、中国人の彼女に感謝します。



ロンドン大学



日本庭園の石碑



◎何度かイギリスを訪れ、多くの教会を見学しましたが、入場料では無く寄付という形をとっています。(日本のお寺とはちがいますね) 中にはレストランがあり、観光客をはじめ、地元の人々の礼拝後の憩いの場となっていました。そしてそれぞれの教会は、大きさに関係なく、何百年という長い歴史があり、自然の厳しさ、人間の戦いや生活を見続けてきたことを考えますと、自然と頭の下がるおもいでした。“ただいま〜”私にとってイギリスはそんな国です。